

宇宙科学研究所／月惑星探査データ解析グループの取り組みについて
Direction of "Lunar and Planetary Data Analysis Group" of ISAS

*大嶽 久志¹、大竹 真紀子¹、田中 智¹、増田 宏一¹、山本 幸生¹、三浦 昭¹、石原 吉明¹

*Hisashi Otake¹, Makiko Ohtake¹, Satoshi Tanaka¹, Koichi Masuda¹, Yukio Yamamoto¹, Akira Miura¹, Yoshiaki Ishihara¹

1. 宇宙航空研究開発機構

1. Japan Aerospace Exploration Agency

月周回衛星「かぐや」は月惑星科学の進展に貢献し、1990年代以降の世界の月探査機で第2位の論文数を創出している。今後、月惑星の起源・進化解明をめざして更に高次の研究で世界を牽引し、「かぐや」等の月惑星探査の成果を最大化するためには、大量の探査データ（海外探査機も含む）を高次処理・解析可能な体制と環境が必要である。これは日本が月惑星探査の戦略／計画を立案し、技術研究を行う観点でも重要である。

米国ではNASAやUSGS（地質調査所）等が高次プロダクト作成のための体制・環境を構築し、研究・探査に活かされている。日本においてはユーザ個人のデータ処理能力・努力に依存する状況であるため、このままでは世界トップクラスのサイエンス成果の発信や、自立的な探査戦略／計画の立案が今後難しくなることが予想される。

このような現状の課題に対し、2016年度よりISASに新設した「月惑星探査データ解析グループ」が今後どう取り組むべきかについて述べたい。

キーワード：探査、大量データ、解析

Keywords: exploration, large amount of data, analysis